第７６回　経営協議会 議事要録

日　時　　令和３年６月２４日（木）１３時３０分～１４時２５分

委　員　　澤　和樹 学長【議長】、安良岡章夫 理事・副学長
日比野克彦 美術学部長、杉本和寛 音楽学部長
桐山孝司 大学院映像研究科長、熊倉純子 大学院国際芸術創造研究科長
遠山敦子 委員、福井俊彦 委員、滝　久雄 委員、谷口維紹 委員
冨田哲郎 委員、二宮雅也 委員、御立尚資 委員

陪　席　　浜田健一郎 監事、上田良一 監事

清水泰博 理事・副学長、麻生和子 理事、
大場　武 理事・事務局長、岡本美津子 副学長、八反田弘 副学長
佐野　靖 学長特命（社会連携担当）
箭内道彦 学長特命（広報・ブランディング戦略担当）
大森晋輔 附属図書館長、黒川廣子 大学美術館長
河野文昭 演奏芸術センター長

欠席者　　国谷裕子 理事

○ 審議に先立ち、議長から新たに経営協議会委員及び陪席者となった者の紹介があり、引き続き大場理事から事務系幹部職員の異動についての紹介があった。
・委　員：御立尚資 氏
・陪席者：大場武 理事（総務・財務・施設担当）・事務局長、大森晋輔 附属図書館長、黒川廣子 大学美術館長、伊藤進吾 総務課長、神永彰 社会連携課長

議題
１．令和２事業年度に係る業務の実績に関する報告書（案）について
議長から標記のことについて提案があり、審議の結果、原案どおり承認された。

２．令和２年度財務諸表（案）について
議長から標記のことについて提案があり、審議の結果、原案どおり承認された。

報告及び連絡事項
１．令和４年度施設整備費補助金概算要求について
標記のことについて、大場理事から資料に基づき報告があった。

２．その他
・本学の取組みについて
○ 澤学長から、芸術文化における本学の近況について報告があった。
・2021/2　「東京藝大デジタルツイン」立ち上げ！
・2021/2　藝大キャリア支援室WEBサイトにて芸術家育成支援及び就職支援発信
・2021/4　令和３年度入学式及び令和２年度入学の式典
・2021/5　国谷裕子理事による対談「クローズアップ藝大」＜河出新書＞が本になりました。
（受賞等）
・2021/5　エリザベート王妃国際音楽コンクールで本学出身者が快挙！
（東京藝術大学若手芸術家支援）
・2021/5　＜若手芸術家世界発信プロジェクト＞「東京藝大アートフェス2021」受賞作品発表記念 公開ウェビナー開催

※コロナ禍におけるご助言、ご提言等
○ 日本の政策の中でリスクを評価することとリスクを管理することの棲み分けをもう少し改善する余地があるのではないか。このあたりをきちんと分けて議論することが重要と

なってくるのではないか。ＪＳＴでもこの件についてはポストコロナにおける提言を行っている。
○ コロナ禍で日本における格差社会の問題が浮き彫りとなっており、経済的な理由で芸術の才能を持っていても東京藝術大学に入れない環境にいる子供達がいることについて、解決は容易ではないが、才能の発掘や社会に夢を与えるという観点から子供達にチャンスを与えられるような仕組みがあるといいのではないか。これからの日本を良くしていくためにも重要なポイントではないか。
○ コロナ禍の中で芸大は良くやっていると実感している。
○ 国際的なコンクール等で入賞された方について、芸大として発表の場を設けることをすれば、学内の奏楽堂等に足を運ぶということに繋がるのではないか。芸大がこれだけ行っているということをコンスタントに発信していくことで、アートの重要性を認識していただけるのではないか。次の段階は、ＰＲしていくことで国民を納得させていくという作業が必要ではないか。
○ コロナによって日本の弱点が明確となったように感じる。例えばリスクに対して、乗り越えるといった気風が日本には足りないように感じる。マスコミもコロナのリスクを煽るばかりで、それにより思考停止に陥ってしまうので、そうではなくこのコロナをどう乗り越えていくのかという克服しようとする議論、建設的な議論に欠けていると感じる。そこで芸大の取り組みを拝見すると、web 上の様々な取り組みやコロナの中でどうやって芸術活動を活性化していくか、また、学生や OB の力を引き出すような努力をされていて、こういった取り組みを日本全体・社会全体が行っていくことが大切ではないか。大学の教育・研究の中においてもこういった問題に対して芸大の役割は大きいのではないかと思われる。新しい時代に向かっての芸術のあり方等について、芸大が先頭になって発信をし、挑戦して新しい価値を作りパブリックに貢献していくといったことに関して、これからの大学運営の中で目指していただきたい。
○ 芸術や文化はオンライン上の処理では本質的なところは付きにくいと感じていたが、芸大では工夫を凝らしながら素晴らしい展開をしていることに対して深く敬意を表したい。オンラインを駆使した上で更なる工夫の余地がないかを常に考えながら今後も進めていただきたい。
○ 芸大の取り組みに関しては、多様な観点から様々な手法で質の向上に取り組んでおり、敬意を表したい。芸大の HP を見るとコンテンツの多様さといった、今求められているリカレント教育の教材に相応しいものが多く存在すると感じる。特に「藝大生の親に産まれて」というコラムは、藝大生を身近に感じさせる良い発信ではないか。そういった意味では発信に対する工夫を感じる。「IR 担当組織を中心として EBPM を推進する」と実績報告書に記載があったが、社会的課題解決のためには科学的根拠を持ち、その取り組みの客観性を保つことが重要な取り組みであると感じている。一緒に取り組ませていただいた DOOR PROJECT については昨年度までの 5 年間行われており、コロナ禍において顕在化した社会的弱者の問題に取り組んできたと思う。芸術と福祉という様々な形（アーティスト・イン・レジデンス等）の試みを行っており、我々の社員にもプラスになり非常に新しい発想であった。これを発展させる形で、JST の共創の場形成支援プログラムについても、リアルとバーチャルの連携や文化リンクワーカーという人材の創出や社会的弱者との共生社会の創出といった取り組みについて大変期待している。ただ、こういった取り組みにおいても、取り組みの成果を確認するための測定と評価は必要かと思われる。全てが定量的にできる訳ではないが、工夫しながら定性的なものも含めて測定評価をして発信することがこれから重要だと思う。それから様々な評価の中でリスク管理と法令遵守の欄が３評価であったが、企業においてリスク管理と法令遵守は極めて重要なことなので取り組みとしては４となっていくべきではないか。また以前ガバナンス・コードに係る適合等に関する報告書の通報制度について、外部に通報窓口を設ける必要はない旨の判断があったが、この件も含めて今一度、法令遵守とリスク管理のあり方を見直してはいかがか。
○ 広報・ブランディングを強化していくという話の中で、今のアーティスト、未来のアーティスト、今の作品、未来の作品だけではなく、これだけ持っている過去からのもの（美術館であり様々なアーカイブであり歴史を持った場であり古美術や修復を勉強している方も含めて様々な過去）と今と未来を繋ぐ強さが本学の近況のところで必ずでてくるといいのではないか。藝大の持っている積み重ねてきたものと掛け合わせて未来を作っているという部分をもう少しお伝えいただきたい。特に海外に行けば行くほど修復に対する藝大の凄さを伺うので、そういった部分でも魅力として発信していただきたい。
○ 世界的にも日本的にも今は人類の新しい展開の曲がり角（コロナや人工知能等々）にいるような気がしている。そういった意味でも大学生らが挑戦意識や使命感意識を持ち、唯一芸術という歴史の中で普遍的な価値を持っている若い学生や教員が一緒になって藝大の中だけでなく他大学にも呼びかけていくような、またデュアル・ディグリーのように一般大学の学生も藝大に来て自分の好きな単位がとれる、議論ができるようなことなども含めて使命感をもって取り組んでいただきたい。